

4) 泥分率

調査毎の層別泥分率の調査結果を図 18 から図 23 に示した。

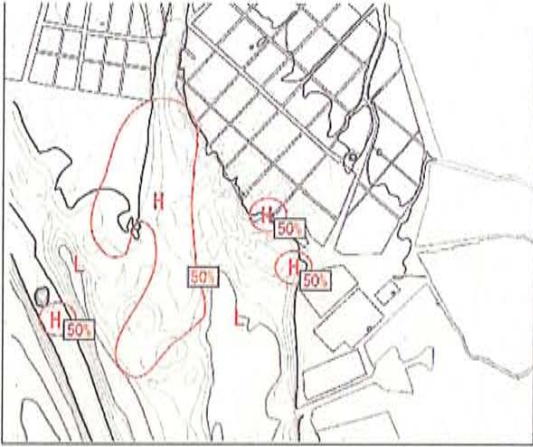


図 18 7月0～5 cm層泥分率調査結果



図 21 11月10～15 cm層泥分率調査結果

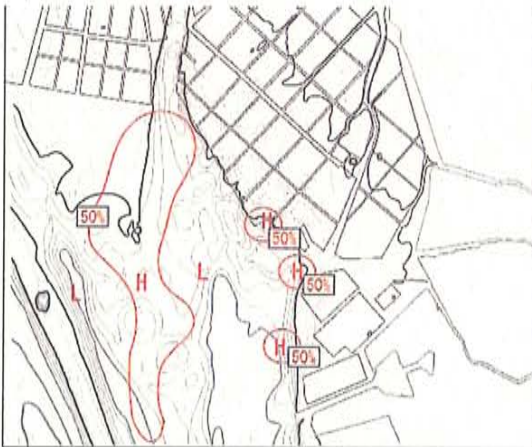


図 19 7月10～15 cm層泥分率調査結果



図 22 3月0～5 cm層泥分率調査結果

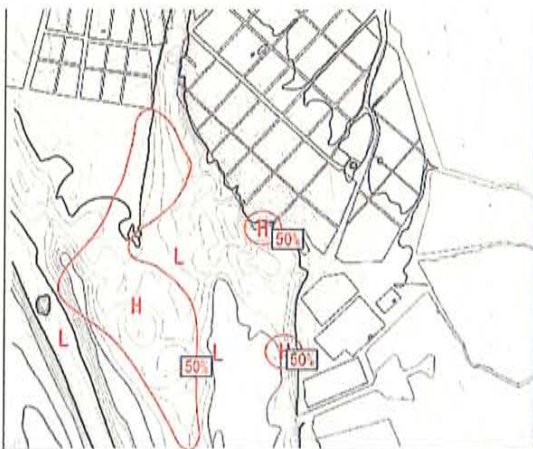


図 20 11月0～5 cm層泥分率調査結果

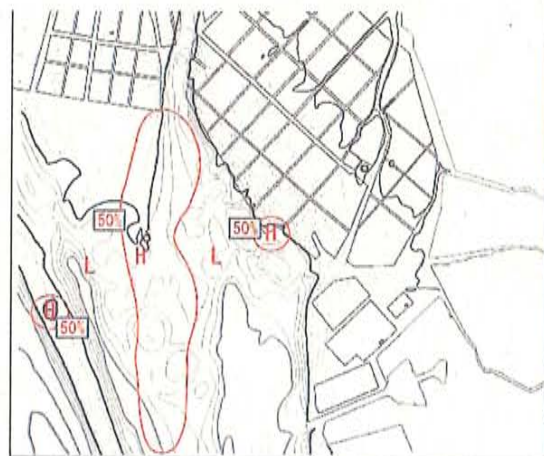


図 23 3月10～15 cm層泥分率調査結果

5) 中央粒径値

調査毎の層別中央粒径値の調査結果を図 24 から図 29 に示した。

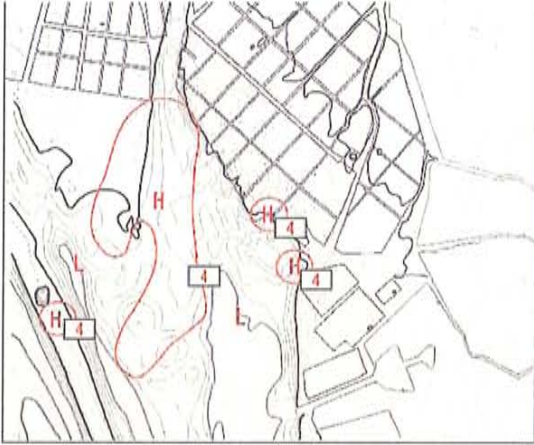


図 24 7月 0～5 cm層中央粒径値調査結果



図 27 11月 10～15 cm層中央粒径値調査結果

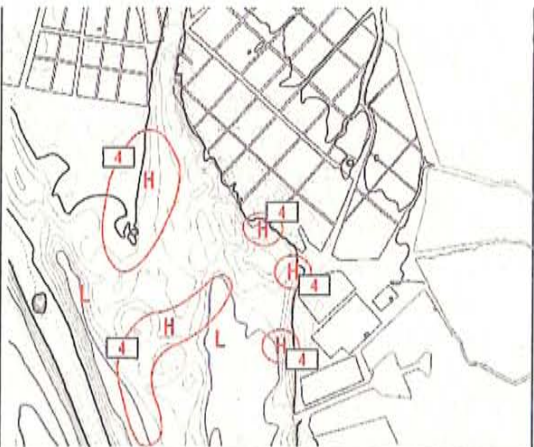


図 25 7月 10～15 cm層中央粒径値調査結果

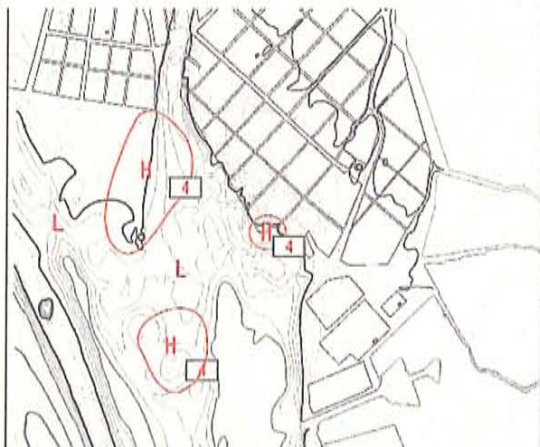


図 28 3月 0～5 cm層中央粒径値調査結果



図 26 11月 0～5 cm層中央粒径値調査結果

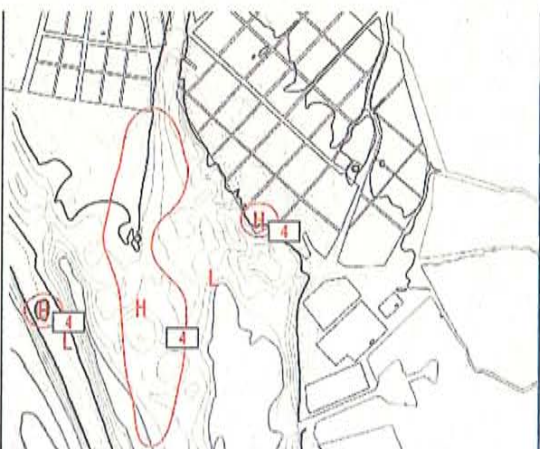


図 29 3月 10～15 cm層中央粒径値調査結果

6) 各海域の特徴

各海域の底質環境の特徴を表1に示す。

表1 各海域の底質環境の特徴

海域名	7月	11月	3月
筑後川 流れ込み	浮泥の堆積は全域で、その他の項目は南西を中心に底質が悪化していた。	浮泥の堆積はやや減少したが、南西側を中心に引き続き底質の悪化が認められた。	浮泥の堆積はさらに減少した。しかし南西部の底質は依然として悪かった。
三池島	三池島の南側では良好な環境が維持されていたが、西側では浮泥の堆積が多く、底質も悪化していた。	西側で細粒化が認められたが、全域で浮泥堆積は少なく、硫化物量、強熱減量も良好な環境にあった。	西側で浮泥の堆積が認められ、表層では西側が、10cm層では南側の環境がやや悪化していた。
峰の洲	全体に浮泥も少なく底質環境も良好であったが、一部調査点の底質は細粒化しており、硫化物量、強熱減量も高かった。	浮泥の堆積状況、底質環境いずれも良好であり、7月に細粒化が認められた調査点の環境も改善していた。	全体的には浮泥堆積も少なく底質も良好であったが、北部の一部調査点の10cm層で細粒化が認められた。
中央部	強熱減量は全域で低かったが、北部よりに浮泥が堆積し、西側を中心に細粒化が進行していた。また硫化物量も一部調査点で高かった。	浮泥の堆積は南側にも広がり、細粒化も南側に拡大した。しかし依然として強熱減量は全体に低かった。	浮泥の堆積は東側で多くなったが、底質の細粒化は西側で顕著であり、硫化物量、強熱減量も西側で高かった。
干潟縁辺部	北部を中心に浮泥が堆積していたが、隣接する調査点でも状況が大きく変わっており、パッチ状の分布が伺われた。	浮泥の堆積は認められず、底質環境もおおむね良好であった。	北部でやや浮泥が増加したが、底質環境は全域で良好であった。
熊本県境	全体に浮泥の堆積もなく、底質環境も良好であったが、谷状の地形にある調査点で10cm層に細粒化が認められた。	浮泥の堆積は認められず、底質環境もおおむね良好であった。しかし、7月同様に一部調査点では細粒化していた。	浮泥の堆積はなく、底質環境も全域で良好であったが、一部調査点では引き続き細粒化が認められた。

浮泥の堆積は、筑後川流れ込みの西側から三池島西側を通り中央部の西側まで、筑後川流心を延長した線の西側で多くなっていた。一方で峰の洲、熊本県境ではほとんど堆積が認められなかった。

硫化物量は筑後川流れ込みから三池島西側の範囲で高かったが、中央部の水深が深くなっている調査点でも高かった。またその他にも局所的に高い点が多かった。

強熱減量は主に筑後川流れ込みの西側で高かったが、その他の海域では総じて低かった。

泥分率、中央粒径値は同様の分布傾向を示し、浮泥の堆

積同様に筑後川流心を延長した線の西側で細粒化が進行していた。しかし、熊本県境周辺では浮泥の堆積が少なかったにもかかわらず、一部で底質の細粒化が進行していた。

(2) タイラギ生息状況

1) 平面分布

調査毎のタイラギ生息状況調査結果を図 30 から図 32 に示した。



図 30 7月タイラギ生息状況調査結果



図 31 11月タイラギ生息状況調査結果



図 32 3月タイラギ生息状況調査結果

2) 各海域の特徴

各海域のタイラギ生息状況の特徴を表 2 に示す。

7 月調査時には 20 年級群が峰の洲で 1 個体確認されたのみであった。

11 月は筑後川流れ込みの北部,峰の洲の西部,中央部の南西部を除くほぼ全域で 21 年級群のタイラギの生息が確認され,峰の洲北部や熊本県境周辺などで 3 分間に 20 個体以上の生息が確認された。中でも熊本県境周辺の一部では 3 分間で 100 個体以上という特に濃密な生息が認められた。

3 月の調査では 11 月に比べて全域で生息密度が増加し,3 分間に 20 個体以上確認された調査点が全体の 3 分の 1 近くに達した。これまで生息が少なかった中央部の北側,東側などの海域でも比較的濃密な生息が確認された。特に熊本県境周辺の西側と中央部の北西では 3 分間で 100 個体以上の生息が確認された。

表2 各海域のタイラギ生息状況の特徴

海域名	生息状況
筑後川流れ込み	11月に東側と南側で3分間で20個体以上確認されるやや濃密な生息点が生じ、3月には南側の生息域が拡大した。一方で北側から西側にかけては調査期間を通じて生息が確認できなかった。
三池島	11月には生息密度は少なかったが、3月には南側でやや生息密度が上昇した。
峰の洲	7月には一部調査点で20年級群が生息していたが、その密度は非常に少なかった。11月、3月は北部を中心に比較的高密度で生息していたが、西側ではほとんど生息が認められなかった。
中央部	南西部では調査期間を通じて生息が無かった。一方、東部及び北部では11月以降生息が認められ、3月には3分間に20個体以上の生息が認められた。特に北西部では3分間に100個体以上が確認された。
干潟縁辺部	11月にはほぼ全域で生息が認められなかった。3月には北部でやや生息密度が上昇したが、全体的には低水準であった。
熊本県境	7月は全域で生息が認められなかったが、11月以降はほとんどの調査点で3分間に20個体以上の生息が確認され、一部では100個体以上が確認された。

2. 定点追跡調査

(1) 浮泥堆積厚調査結果

定点追跡調査における調査点別の浮泥堆積層厚の平均値、最小値、最大値を表3に、調査点別の浮泥堆積層厚の推移を図33に示した。

表3 各調査点の浮泥堆積厚(mm)

調査点	平均	最小	最大
三池島	4.7	2.0	10.0
大牟田北	3.7	2.0	11.0
三池港	3.9	1.0	10.0
峰の洲	4.4	1.0	10.0

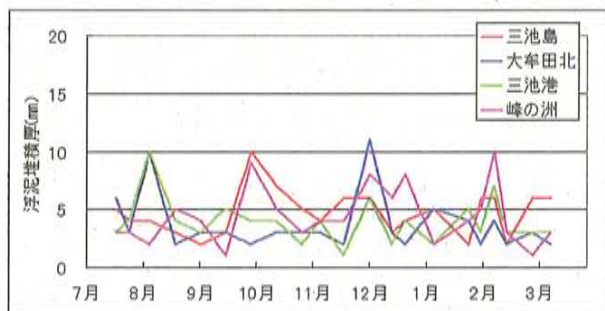


図33 浮泥堆積厚の推移

浮泥の平均堆積厚は3.7～4.7mmであり、いずれの調査点にも大きな差は認められなかった。また最小値、最大値にも大きな差は認められなかった。

浮泥の堆積はいずれの調査点でもおおむね10mm以下で推移したが、大牟田北では12月に11mmの堆積が確認された。またいずれの調査点でも調査毎に変動が大きかったが、季節による明確な傾向は認められなかった。

(2)底質調査結果

1)硫化物量

定点追跡調査における調査点別の硫化物量の平均値,最小値,最大値を表4に,調査点別の表層の硫化物量の推移を図34に,10cm層の硫化物量の推移を図35に示した。

表4 各調査点の硫化物量(mg/g乾泥)

調査点	測定層	平均	最小	最大
三池島	表層	0.04	0.00	0.20
	10cm層	0.07	0.03	0.10
大牟田	表層	0.02	0.01	0.06
	10cm層	0.04	0.00	0.08
三池港	表層	0.06	0.00	0.24
	10cm層	0.09	0.00	0.58
峰の洲	表層	0.02	0.00	0.04
	10cm層	0.02	0.00	0.06

2)強熱減量

定点追跡調査における調査点別の強熱減量の平均値,最小値,最大値を表5に,調査点別の表層の強熱減量の推移を図36に,10cm層の強熱減量の推移を図37に示した。

表5 各調査点の強熱減量(%)

調査点	測定層	平均	最小	最大
三池島	表層	5.3	3.5	12.4
	10cm層	6.3	3.0	14.9
大牟田	表層	5.0	3.6	6.8
	10cm層	4.1	3.1	5.8
三池港	表層	5.0	2.6	14.1
	10cm層	4.1	2.6	6.9
峰の洲	表層	4.1	3.0	6.0
	10cm層	3.2	2.5	3.8

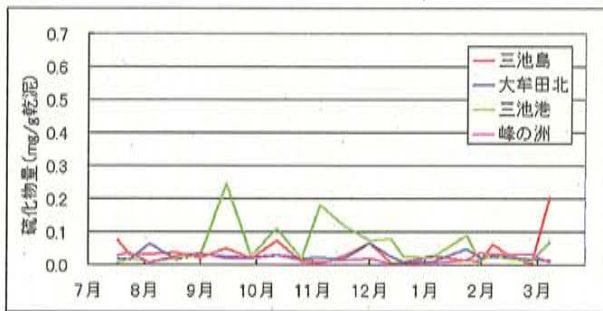


図34 表層硫化物量の推移

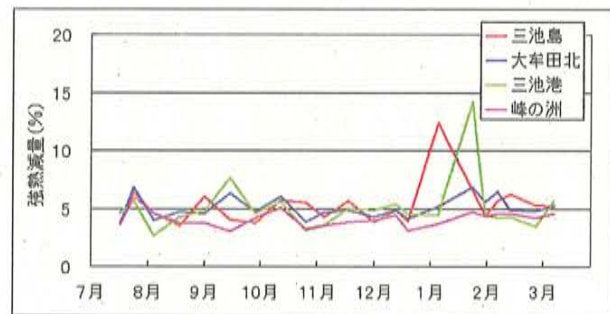


図36 表層強熱減量の推移

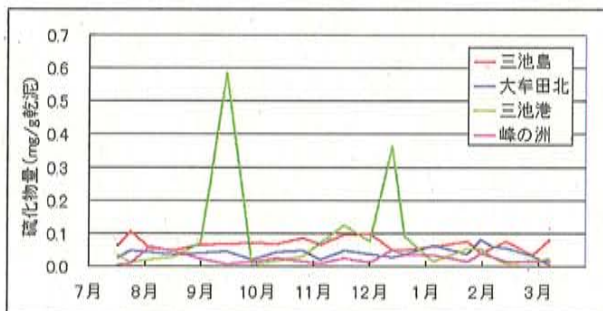


図35 10cm層硫化物量の推移

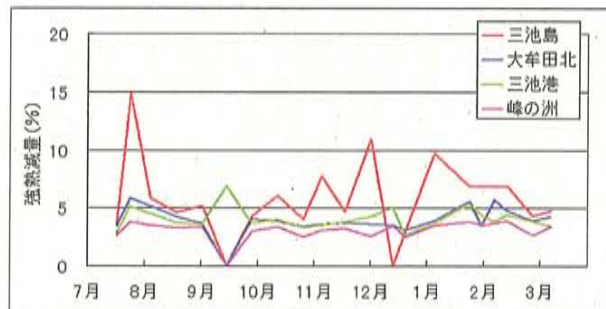


図37 10cm層強熱減量の推移

表層の平均硫化物量は0.02～0.06mg/g乾泥であった。三池港では変動が大きく,9月には0.2mg/g乾泥を超えていた。また三池島でも3月に0.2mg/g乾泥を超えていた。

10cm層の平均硫化物量は0.02～0.09mg/g乾泥で概ね0.1mg/g乾泥以下で推移したが,三池港では9月と12月に,0.2mg/g乾泥を大きく上回っており,表層同様に三池港で最も変動が大きかった。

表層の平均強熱減量は4.1～5.3%であり,1年を通していずれの調査点でも5%前後で推移していたが,1月に三池島,三池港で10%を超える値が観測された。

10cm層の平均強熱減量は3.2～6.3%であり,三池島でやや高かった。三池島は変動が大きく,7月に14.9%,12月にも10.9%となったが,その他の調査点はおおむね5%以下で推移した。